

PUSH!!連載ショートストーリー

第1話「magpie」

文：なかひろ
イラスト：司田カズヒロ

「メア。今夜はここにいたのか」

「洋くん……」

「いつもは柵干の上に座ってるのに。どうしたんだ？」

「……かーくんが」

「かー坊になにかあったのか？」

「元氣なくて……」

白色の竜の子どもが、メアの膝に載っている。

メアがかささぎと名付けたその子は、翼を休めて眠っているようだった。

「最近、ほとんど飛ばなくなってる……。飛んでも、すぐに戻ってきて……」

メアは何度も、かささぎの頭を撫でる。

「眠いみたいに、目を閉じて……。疲れたみたいに、動くのを嫌がって……」

様子を窺うと、かささぎの顔が赤らんで見える。

「熱がありそうだな……」

「……そういえば、かーくんすごくあったかい」

「風邪か……？」

「そうなの？」

「いや、竜が風邪を引くものなのかわからないけど」

熱があると顔を赤くするのかすらわからない。

「さわってみていいか？」

「うん……」

洋はかささぎの額に手を当てる。

「ぼー」

「あちぢぢぢぢぢぢつ……」

かささぎが炎を吐いて洋の頭を焼いた。

「どうだった？」

「わかるか……」

炎はいつもより熱かった気がする。

「かーくん、風邪なのかな……」

「とりあえず、様子を見るしかないな」

動物病院で診てもらうことは難しい。新種扱いをされたら、下手をすると

二度と会えない。

「わたし、かーくんが苦しんでるのに、なにもしてあげられない……」

「今、してあげてるじゃないか」

「……え？」

「そうやって撫でてるじゃないか」

「……」

「かー坊、気持ちよさそうじゃないか」

膝の上でまた眠りについたかささぎは、幸せな夢を見ているに違いない。

顔は熱っぽくても、そう思わせる表情を浮かべている。

「わたしが撫でると、かーくん元気になる？」

「ああ。たぶん」

「たぶん……」

「絶対だ」

「……うん」

「俺も、ちよくちよく様子見に来るから」

「洋くん、いつも来てるけど」

「もつと来るようにする。夜以外、メアとかー坊って展望台にいないのか？」

「昼間は……がんばらないと、ちよつと難しい」

「そうか。だったら、夜になるべく長くいるようにする」

メアは、洋をじつと見る。

「どうした？」

「……わたし、洋くんに頭撫でられると、いつも変な気持ちになる」

「前にそんなこと言ってたな」

「だから、かーくんも、今はそんな気持ちかなかな」

メアの瞳に、慈しみの色が宿る。

その色は頭上に広がる、雲雀ヶ崎の星空に似ていた。

「そんな気持ちがあつと大きくなれば……辛いのも、なくなるかな」

「そうだな。気にならなくなるかもな」

「でも……熱は、下がらないかな」

洋は、メアの頭を撫でる。

するとメアの顔も、かささぎに負けないくらい赤くなる。

「身体は辛くなくなつても、心は苦しいままかな……」

※

「さてさてやつて参りました、放課後の時間だよー！」

「テンション高いな、明日歩」

「やつと部活ができるんだもん。あたしはのために学校来てるようなものだしね」

「テストで赤点取つて補習になったら、部活の時間も削られると思うんだけどな」

「そんな未来のことより、あたしは今を大切に生きたいの」

「未来を疎かにすると、明日の天体イベントも見逃すハメになるんじゃないか」

「……なるべく授業は寝ないようにする」

「明日歩さんにとつては、先生の言葉より小河坂さんの言葉のほうが効果てきめんみたいですね」

メアと、かささぎの体調について会話を交わした翌日。

授業が終わると、明日歩、こさめを伴つて部室に向かう。

洋たち三人はすでに進級し、三年生となつてゐる。

二年生の頃にはいろいろあつた。大きな事件も経験した。

それでも天クルの仲間だけではなく、メアも夢も、洋のそばにいてくれる。

それを普通と言へる今が、かけがえのない時間としてここにあつた。

※

「明日歩、今日の部活は？」

「さつき洋ちゃんも言つたじゃない。七夕の観測会が終わつても、まだビッグイベントが控えてるから……」

「明日のために、その準備をするのか」

「うん。天クルの名に恥じないようにしないとね」

雲雀ヶ崎だけではなく、全国の天文ファンが楽しみにしているそのイベント。

世界天文年の今年にふさわしく、天体に興味がなかつた人たちだつて、その日は空を見上げるだろう。

「そんな年に天クルに入つてたなんて、きつと末代まで自慢できるね」

「卒業した岡泉先輩は悔しがつてるかもな」

「先輩だつてあたしたちと同じ気持ちだよ。遠くに離れてたつて、見上げる空は同じだからね」

「……………」

「……こさめちゃん？」

「あ……はい」

「どうかした？ さつきからばーつとして」

「……いえ。なんでもありません」

こさめは心ここにあらずといった様子だ。

こんなこさめを、洋は過去に見たことがある。

「……すみません。今日は早退してもよろしいですか？」

「えつ……」

「それでは」

明日歩がなにか言うより早く、こさめは部室を出ていった。

「……どうしたんだろ、突然」

「……………」

「こさめちゃん、なんでもないつて言つたけど……。そんなふうに見えなかつた」

「……そうだな」

こさめは、満月が近くなると部活を休みがちになる。

満月の日は、学校も休んで自室にこもつてしまう。

それが、星神と星霊の間をたゆたう、こさめの秘密。

「ただ満月はもう過ぎている。理由はべつにあるのだろうか。」

「こさめちゃん、体調悪かったのかな……」

「そういえば、かー坊も風邪引いたみたいなんだよね」

「メアちゃんのペットだよ。ドラゴンも風邪引くの？」

「……さあ」

明日歩の問いに答えられる者は、こさめの秘密と違つて誰もいない。

だが洋は、かささぎの体調不良はこさめの早退と同じ理由なのかもしれないと、なんとなく感じていた。

「準備の人手、少なくなつちやつた」

「そうだな」

「蒼さんも、来ないね」

「……そうだな」

※

「えっ……」

衣鈴が学校から帰ると、家の前でメアを見つけた。

いつもは夜にしか会えないメアだから、衣鈴はよけいに驚いた。

「……なぜ子どもがここに」

「子どもじゃないわ。わたしはあなたよりお姉さんよ」

「その反抗期じみた背伸びはいったいつ終わるんでしょう」

「……この子だけは洋くんの次に刺す」

「洋先輩に用事なんでしょうか」

「……そうだけど」

「先輩は部活中だと思います。帰ってくるのはもう少し先かと」

「……そう。というか、あなたも天クルの部員じゃないの」

「部員ですけど」

「じゃあなんで帰ってきてるの」

「明日、大きな天体イベントがあるんです。その準備がいそがしそうですので、お先に帰らせていただきました」

「……要するにサボったのね」

「メアさん、昼間でもこうして姿を出せるんですね」

「……疲れるけど、ちよとの間なら」

「それだけ洋先輩に会いたいんですね」

「……べ、べつに」

「頭を撫でられたいんですね」

「そ、そうじゃないっ」

「洋先輩なら、ケータイで呼ぶこともできますけど。どうしますか？」

「……洋くんなんかどうでもいい」

メアは怒ったように回れ右をして、展望台に戻ろうとする。

「用事はいいんですか」

「……べつに」

「帰るなら、その前に言つてくらい頼めますけど」

「……あなたが親切だと、不気味」

「いちおう、メアさんには感謝しているんです。鈴葉と友達になつてくれて……」

「………」

「……それで、どうしますか？」

メアは、弱々しくつぶやく。

「かーくんが、いなくなつた……」

「………」

「捜しても……見つからなくて……」

途切れ途切れの言葉のあと、メアの身体がかたむいた。

急なことに、衣鈴は慌ててメアを支える。

「こんなの、初めてだから……わたし……」

メアは辛そうに呼吸する。

触れている身体が熱いことに、衣鈴は気がついた。

その姿は、空気と同化するように揺らいでいた。

※

「……こさめ。これから部屋？」

「はい、姉さん。宿題を終わらせないと」

「そのまま部屋から出てこないの？」

「……………」

「明日は満月つてわけじゃないけど……。だけど、そんな気がして。違ってた
ら謝るわ」

「……姉さんには、隠し事ができませんね」

「双子の性つてやつね。じゃあ……」

「はい、当たり前です。お母さんにもすでに伝えてあります」

「ねえ、こさめ。わたしたちは、あなたの姿がどんなになっても気にしない。
なのに閉じこもるの？」

「はい」

「……………」

「姉さんの心遣いには感謝します。ですけどこれは、ケジメなんです」

「ケジメつて……」

「あまり深く捉えないでください。もつと単純な……たとえるなら、メアさ
んです」

「……どういふことよ」

「メアさんは、夜にしかな姿を出さないじゃないですか。それを気にする人はい
ないじゃないですか」

「よくわからないわ」

「双子でも、なんでもわかるわけではありませんよね」

「じゃあ、こさめ。もしもメアさんが、昼にも姿を出してくれたら……」

「……そうですね。それはメアさんにとつて、とてもがんばらないと難しいこ
とですけど」

「あなたも、がんばってくれるのよね」

「……はい」

こさめの返事には意志が宿っている。

望む未来をつかむ、それは希望よりも確かな目標だ。

「わたしも、もつと心が強くなれたなら、きつと……」

※

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん——んっ、おかえりなさ——い！」

「お待ちしました」

「……蒼さんまで迎えてくれるとは思わなかったな」

「非常事態が起こりましたから」

「蒼さんが部活サボったことか」

「それは普通の事態です」

「サボりを普通と言える部活仲間がいることが俺の非常事態だな」

「そんなことよりお兄ちゃんっ、メアちゃんがおうちに遊びに来てるんだよっ」

「……まだ夕方なのか？」

「遊びというか、洋先輩に用があるみたいです」

「なんの用事だ？」

「本人に聞いてください。私たちではどうしようもない用事のようなから」

衣鈴は、誰にも聞こえないくらい小さな声でつぶやいた。

「……先輩は、よほどメアさんに好かれてるんですね」

※

「メア」

「……………」

「さっき、蒼さんから聞いたんだ。俺に用事なんだろう？」

メアは、洋の部屋にいた。

洋を待つならここがいいと、メアがゆずらなかつた。そう千波たちから聞い
ている。

「こんな時間に訪ねてくるんだから、大切な用事なんだよな」

「……………」

「……どうした、いつにも増して無口だけど」

「……かーくんが」

短い言葉でも、メアの心配が充分に届く。

「まさか……風邪がひどくなったのか？」

「わからない……。だけど、かーくんがどこにもいない」

メアの華奢な肩が震えている。

「……俺たちならまだしも、メアでも見つけられないつてのはおかしい話だな」

「わたし……どうしたら……」

「大丈夫だ。すぐに見つかる」

かささぎは、メアの大事な友達だ。ベット以上の位置を占めていることは誰の目からも明らかだった。

「いつからいなくなったんだ？」

「……昨日、洋くんが帰ったあと」

「昨夜は膝枕してあげてたよな。かー坊が目を覚まして、勝手に飛んでいったのか？」

「わからない……。わたしも、いつのまにか眠ってて。起きたら、かーくんがいなかった」

「……かー坊がどこに向かったのかもわからないわけか」

「具合悪そうだったのに……どうして……」

メアの震えが大きくなる。

労るように、洋は優しく抱きしめる。

「俺に用つていうのは、かー坊を捜すことだったんだな」

「……それだけじゃない」

「ほかにあるのか」

「……………」

メアも、おずおずと抱き返してくる。

顔を、洋の胸に押しつける。

それで気づいた。メアの体温が高い。

「メア……おまえも、熱があるんじゃないか？」

「……………」

「体調、悪いのか？」

「……………」



「かー坊の風邪がうつったとか……」

「……知らない」

「それか、こんな時間に姿出してるのが負担になってるとか……」

「……わからない」

洋はまだ知らない。

メアだつて、はつきりとわかっているわけじゃない。

メアのもうひとつの用件、それはこうして洋のそばに居ることだった。

メアは寂しかった。

一人の夜は、もう嫌だから。

だから、そばにいて欲しい。

好きな人のそばにいたい。

それが、メアが求めたぬくもり。

洋以外には叶えられない、大切な用事。

「……なあ、メア」

「……………」

「キス、しようか？」

メアの肩がびくんと跳ねる。

「……嫌」

「おでこと唇、どっちがいい？」

「い、嫌って言った」

「じゃあ、やめようか」

メアの肩が、もう一度揺れた。

ぎゅつと、強く抱きついた。

「い、嫌……」

メアの震えは、熱のせい。

体調不良は確かにあるのだけど、それよりも大きな熱がメアの身体に生

まれている。

だから、こんなにも熱くなる。

「んっ……」

キスを交わすと、もう、真っ白になるくらいで。

「よ、洋くんに、キスされた……」

「そうだな」

「勝手にされた……」

「メアも同意したじゃないか」

「い、嫌って言った……」

「キスされないのが嫌なのかと思った」

「そ、そうじゃない……」

メアは顔を見られないよう、もう一度、洋の胸に顔をうずめた。

「洋くんの、バカバカ……」

二人は長い時間を触れあっていた。

メアは疲れていたのか、洋に抱かれたまま眠りについていた。

その寝顔は幸せな夢を見ているようだった。

いつしか空には、織姫と彦星が瞬いていた。

「子どもの忠告なんか受けないわ」

「私は大人のお姉さんです……」

「わたしのほうが大人のお姉さんよ」

「クスクス……ちゃんちゃらおかしー……」

「……腹立つんだけど」

「それでは……」

レンは言うだけ言つて帰つていった。

これが昨夜的一幕だ。

ここが急に静かになると、よりいっそう寂しさが募っていく。

この翌日、メアが陽が落ちる前から洋に姿を見せたのは、その想いを埋めるため。

一刻も早く、洋のそばにいたかったからだつた。

※

「先生、今日がなんの日か知ってます？」

「さすがに、これだけ騒がれていたらね」

主治医である姫神先生の診察の最中、夢は終始うきうきしていた。

「僕のようにあまり天文に詳しくなくても、気になってしまいうくらいだからね。キミはよほど楽しみなんだろう」

「はい。時間になったら観測するつもりです」

「患者に医師に看護師に、病院の屋上は大いに賑わうんだろうね」

「先生も来ます？」

「仕事が入っていたらね。何時からだつたかな」

「十時頃から見え始めて、十一時がピークです」

「じゃあ、もうすぐだね」

「だから先生、診察は手取り早くお願いしますね」

「それはキミ次第かな」

「先生がぐずぐずして遅くなったら、抜け出しちゃうかも」

「……僕じゃなくて、キミがそんなふうだから、いつも時間がかかってしまう

んだけどね」

※

「洋ちゃん、どうかした？」

「……どうつて？」

「元氣ないみたいだから……」

部室から、観測のための道具を運んでいる途中。

洋は気がかりだつた。

昨夜、メアは洋の部屋に泊まった。

眠つてしまったため、そのままベッドに寝かせたのだ。

そして朝起きたら、メアの姿はなくなっていた。

学校が始まるまでの時間、展望台を捜してみたが、やはり見つからない。

普段は夜にしか姿を見せないメア。

だが、昨日は違つていた。

だから、見つけれなかったことがなおさら不安だつた。

「なにかあったの？」

「……いや、なんでもない」

「だったら元氣出して。せつかく授業がなくなつたんだし」

「この観測だつて授業の一環なんだけどな」

「ヒバリ校はもともと、天文には熱を入れていた学校だからね」

一緒に歩いていたこももが口を出す。

「そうじゃなくても、今年は世界天文年だし」

「こももちゃんらしくない発言だね」

「……わたしも天クルの一員なんだけど、いちおう」

「いちおうじゃなくて、れつきとした部員だ。昨日も俺たちと一緒に準備してくれたしな」

「……ふん」

「こももちゃん、今日こさめちゃんが休んでるけど……」

「そうよ。体調不良つて、先生から説明なかった？」

「あつたけど……」

「南星さん。そんな心配しなくても、大事はないから」

「……………」

「小河坂くんに元気出させて言った本人が、そんな顔しててもしょうがないでしよ」

「……むー」

「はいはい、お手」

「犬扱いしないでっ」

三人が屋上に出ると、そこはすでにほかの生徒でいっぱいだった。

眼下に見える中庭やグラウンドにも溢れかえっている。

「やっと来たな」

屋上で場所取りをしていた雪菜が、洋たちに軽く手を振った。

「ありがとうございます、先輩。いい場所取っててくれて」

「礼は筋違いだろう、私だつて天クルのOGだ」

雪菜はすでにヒバリ校を卒業している。

高台にあるこの校舎は、絶好の観測スポットであるため、卒業生も何人か足を運んでいた。

「岡泉先輩も、都会の大学で空を見上げてるかな……」

「ああ、きつとな」

「南星さん、早く準備始めないと」

「そうだね。見逃しちやつたら一生の不覚だもん」

作業を進める明日歩とこもともに、洋も続こうとしたところで、雪菜が呼び止めた。

「少しいいか、小河坂洋」

「……フルネームで呼ばないでください」

「姉姉姉のように略せばいいのか」

「コガヨウもやめてください」

「展望台の死神はどうしている？」

「……………」

「普段と違っていなかったか」

「……先輩は、なにか知ってるんですか？」

「ああ。面倒な説明は省くが、今度のようなケースは稀だ。満月のたびに影響を受けるこさめとは違ってな」

その言葉で、洋はようやく合点がいった。

メアやかささぎの変化は、このイベントに関係していたのだ。

「今回のイベントに限っても、次にあるのは何十年も先らしいじゃないか」

「……じゃあ、こさめさんが今日、満月じゃないのに学校を休んでいるのは？」

「今年の七月は、例年よりも天体の干渉が激しいらしい。なにせ、七夕と満月、そして今日という日が同じ月にあるのだから」

その三つが重なる月は、二十一世紀ではこの七月だけなのだと、雪菜は付け加えた。

「……こさめさんは、どうしてます？」

「心配はいらない」

「……………」

「例年と違うと言つても、気に病むことはない。たとえるなら、風邪が少し長引く程度だ」

「だから、メアに関しても気に病むなんて？」

「まあ、そういうことだ」

「もしかして、メアを気にかけてくれたんですか」

「……罪悪感があるだけさ。私は、一度あの死神を襲ってしまったからな」

雪菜はそっぽを向いてしまう。

ぶつきらばうな態度に、この人らしいかと、洋はつい笑ってしまいそうになった。

※

「時間的には、いよいよね」

「はい。楽しみです」

万夜花と詩乃は星天宮の境内に立っている。

この場所は開けているため、観測にはちょうどいい。

「空も晴れてくれたしね。これで雨だったら泣けたけど」

「七夕で言う催涙雨になりますね」

季節は初夏。今日も気温が高いため、二人は木陰に入っている。

「なんとか間に合ったね」

総一郎が、額の汗を拭いながら歩いてきた。

「あんたは来ないと思ってたわ」

「詩乃に、ここと聞いたからね」

「じゃなくて、店のほうはどうしたのよ」

「午後からの開店にしたよ。もともと午前中はお客がほとんど来ないから」

「今日は特に、住民の皆さんもそれどころじゃないかもしれないね」

「そんな、地元の学校が甲子園出場してるみたいな盛り上がりはないと思うけど」

「学生時代に天文部だった僕たちには、甲子園以上のイベントさ」

「天文学者のあんたが言うのと嫌味に聞こえるわ」

「なんでそうなる。それに僕は、引退した身だ」

総一郎はあごを揉みながら、

「だけど、僕の中でも、いいキッカケになるかもしれない」

「そろそろ復帰ですか？」

「運良く、研究所から誘いの声が届いているんだけどね」

「踏ん切りがつかないのは、明日歩ちゃんのためですか？」

「まあね」

「明日歩ちゃんも来年には卒業なんだし、お店ゆずつてあげたらいいじゃない」

「さすがにそれは早いかな」

「あんたが店長やつてるより、客も喜ぶでしょうに」

「……どういう意味だ。それより、時間だよ」

三人は木陰から空を見上げる。

「今ごろ、娘たちもこうしているのかしらね」

「万夜花さん。こさめちゃんも……」

「今は部屋にいるけど。だけど同じじゃないかしら」

万夜花の声には、親としての愛情に満ちていた。
「きつと、窓から空を見上げているんじゃないかしら」

※

「わあ、見て見て！ 空が暗くなってきたよ！」

明日歩の言葉を皮切りに、屋上から一斉に声が上がった。
皆既日食———

雲雀ヶ崎では十時頃から見え始めた。

月が、太陽の前を横切っていく。

その縁が明るく輝き、代わりに一面が薄闇に覆われる。

夜明けや夕焼けとはまた違う、昼と夜の狭間にある光。
神秘的であり、ダイナミックな光景だ。

一部の地域では、太陽が月によつてすべて隠れる、皆既日食が観測される。
雲雀ヶ崎では部分日食しか観測できないが、それでも充分な感動をもたらせた。

「こんな空、生まれて初めて見るよ……」

「そりや、日本では四十六年ぶりらしいし。わたしたちは生まれてないわ」

「次はいつになるかわからないし、たくさん写真撮っておかないと」

こももの茶々も耳に入っていないのか、明日歩はいそがしそうにシャッターを切っている。

部室から運んできた、自作のピンホールカメラ。

写真撮影のために、昨日用意したものだ。

肉眼で直接太陽を見ると、短い時間であっても目を痛めてしまう。

下敷きやゴーグルなんかを使つてもそれは同じ。望遠鏡や双眼鏡だと、肉眼以上に危険だ。

そのため、生徒はそれぞれ日食専用の道具を持ち寄っている。

「見て見て蒼ちゃんっ、千波のサングラス姿だよ」

「……見るのは千波さんじゃなくて、日食だから」

千波と衣鈴は日食グラスで観賞している。

店で簡単に手に入るし、これが一番お手軽な方法だ。
「ずっと上見していると首が疲れるし、わたしは鏡のほうがいいわ」

こももは手鏡を使い、壁に光を反射させる。

すると、欠けた太陽が即席スクリーンに映し出される。

この方法なら、なにも道具を持ちあわせていない生徒も一緒に観賞することができるとができる。

「……昔から、七夕や満月の日は、願ひ事が叶うと言われていたな」

雪菜がぼつりとつぶやいた。

「ならば、日食もなにか、そういった不思議な力があるのかもしれないな」

それは独り言だったのかもしれないが、洋はうなずいた。

メアやこさめに限らず、星の光は人々を狂わせる。

夢の病気のような例もある。

だけど、今日という日だつてある。

空に浮かんだ星々は、その光で、この星に住む命を見守っている。

※

メアは眠りにについている。

あたたかい光を抱きながら。

想い出という名の光。

抱き心地がいいから、それを手放したくなくて、メアはいついつい寝過ぐすことが多くなる。

そうになると、洋が展望台を訪れても気がつかなくて、登場が遅くなる。

洋は、メアを捜すハメになる。やっと見つけたと、呆れた顔をメアに見せる。

メアは、べつになにも答えない。

赤くなる顔を見られたくなくて、スネたように横を向いてしまう。

洋のことを想いながら眠っていたから、起きるのが遅くなったなんて、口が

裂けても言わない。

そんなメアの顔を、洋はしょうがないと言わんばかりに撫でてくる。

メアの顔はますます赤くなる。

だけど、やつぱりなにも答えない。

されるがまま。



洋は、メアにたくさんのなにかを与えているけれど、メアは素直じゃないからなにもしない。

また、そんな夜が来るのだろう。

そうやって想い出は積み重なる。

あたたかい光は、明るさを増していく。

抱えきれないくらいに。

きつと、この胸からこぼれ落ちてしまったら。

この想いが押さえきれなくなったら。

メアも、洋になにかを与えるのだろう。

そんな夜も、いつか来る。

与え、与えられ、求め、求められ。

頼り、頼られ、甘え、甘えられ……。

そんな夜も、いつか来る。



PUSH!!連載ショートストーリー
第3話「Starlight」

文：なかひろ
イラスト：司田カズヒロ

「日食……すごかったな」

夢は病室のベッドで休んでいる。

まぶたを閉じれば、昼の光景はすぐにも描かれるだろう。

頭はそんなふうに鮮明でも、身体のほうが疲れていた。

病気は快方に向かっているが、まだ体力が戻っていない。

それでなくとも、日食ではしゃいでしまい、まだ夕方なのにこうしている。

姫榊先生には呆れられ、今日は早めに休みなさいと釘を刺されていた。

「もう、眠るのは怖くないしね……」

二度と目覚めないかもしれないという恐怖は、すでにない。

「洋くんのおかげだよ……」

そして、死神さんのおかげだよ。

心の中で言い添える。

二人のおかげで、今の自分がいるのだと。

夢は、安心して眠りにつこうと、瞳を閉じようとした。

「かーくん」

その前に飛び込んできた光景に、眠気までも吹き飛んでしまった。

「もう……やっと捕まえた」

いつからだろう、白い人影と白い獣がそこにいる。

夢も見知っている、メアとかささぎだった。

「死神……さん？」

夢はベッドから身体を起こす。

今はかささぎを抱いているメアのほうも、夢に気づいている。少し居心地悪

そうにして。

「……寝てたの？」

「うん。ちよつと早いけどね」

「病気……まだ、辛い？」

「ううん、そうじゃないの。死神さんこそどうしたの？」

メアは言いにくそうに、

「さつき、やつと見つけて……」

「かーくんのこと？」

「うん……。それで、追いかけてきた」

「……展望台から、こんなところまで？」

「かーくん、あなたに懐いてるみたいだから」

かささぎがメアの胸から飛び立つと、夢の頭に着地した。

「……私の頭、巣じゃないよ？」

「わたしもよく巢にされる」

「私に懐いてるのつて、死神さんと髪の色が似ているせいってだけじゃ……」

「かーくん」

メアが呼ぶと、かささぎは戻っていった。やっぱり頭に着地する。

「じゃあ、帰る」

「あ、待つて」

「……なに」

「死神さん。洋くんとは、どう？」

「どうつて？」

「仲良くしてる？」

メアはきよんとする。

「あまのじやくなことばかりして、あまり洋くんを困らせないようにね」

「……どういう意味」

「そのままの意味」

夢は微笑を浮かべている。

それは、親が子にするような包容を感じさせる。

「死神さん……メアだつて、洋くんのこと好きなんでしょ」

「……」

メアの顔が赤くなる。

「好きなんだよね」

「そ、そんなことない」

「だから、洋さんと仲良くね」

「……洋くんなんか知らない」

「あんまり素直じゃないと、怒っちゃうよ」

メアは、まるで親に叱られたような様子で。

「だつて……よく、わからない。この気持ち……」

「うん。それは、ぜんぜんいいんだよ」

「……なにが言いたいのかわからない」

「それでもいいんだよ」

「さつきから、よけいなお世話つて気がする」

「そうだね、ごめんね。これは私の、勝手なお願ひ事だから」

夢は、メアの頭を撫でて言つたのだ。

「だつて今日は、七夕よりも満月よりも特別な、日食だつたんだから」

※

それは、今朝の出来事。

日食が始まる前の時間。

メアは、洋の寝顔を見ていた。

ベッドはメアが使っていた。だから洋は、床に布団を敷いて眠っている。

洋の寝息が聞こえる頃に、メアは起き出し、それからずっとこうしている。

そばに座つて、洋を見つめている。

洋は気がついていなかっただろう、メアは昨夜から一睡もしていない。

体調が悪く、ベッドに寝かされ、だけどそれは人でいう睡眠とは違つていた。

意識はちゃんとあつた。洋にベッドまで抱っこされたことも覚えていた。

そのときはドキドキして、体調不良とは関係なく、言葉を発することさえ

できなかった。

「洋くん……」

すでに陽は昇り、カーテンを開ければこの部屋にも陽光が射すだろう。

洋もそろそろ起きる時間だろう。

そうなる前に、メアは姿を消すだろう。

限界が近かつた。もう、姿が維持できない。

今日は日食。そのために、この星に降り注ぐ光のバランスが狂っている。

メアはそんなこと知る由もない。だからこれまで、がんばつて姿を見せていた。

洋のそばにいたかつたから。

いつもみたいに頭を撫でて欲しかつたから。

「……洋くんなんか嫌い」

だけどメアは素直になれないから、相手が眠っていてさえ反対の言葉が出る。

「洋くんなんか……大嫌い……」

メアの顔が、洋の寝顔に近づいていく。

なんだろう、この衝動。

わたしはなにをしようとしているの？

胸が痛い。

呼吸が早く、熱くなる。

身体全部が熱くなる。

切なく、もう、死んでしまえそう。

そして、メアの唇が、洋のそれに重なる瞬間。

「んん……」

洋の口が動き、メアは飛び上がつて離れてしまう。

そのまま姿を隠してしまう。

洋のまぶたが開き、すぐにメアの不在を知り、部屋を出ていく様子を、メア

は消えたまま眺めていた。

「……バカバカ」

メアは、しばし眠りにつくことにする。

このドキドキは苦しいけれど、きつと幸せな夢が見られるに違いない。

そう願つて。

目覚めたときに、この続きが待っていることを願つて。

※

「姉さん、お帰りなさい」

「……こさめ。もう大丈夫なの？」

「はい。ちなみに日食もちゃんと観賞しましたよ」

「……そう」

「あんな光景を見せられると……わたしは、月も星もやっぱり憎めません」

「そう」

「わたしが天クルに所属しているのも、その証拠ですしね」

「入部したのは、南星さんの強引な勧誘が理由じゃなかったんだ」

「もちろん、明日歩さんが星の魅力を熱心に語ってくれたおかげですよ」

「南星さんに感謝してるの？」

「はい。月や星から目を背けていたわたしを、変えてくれたんですから」

「天クルの活動もラスト一年。悔いが残らないようにね」

「それは、姉さんにも言えますよ」

「わたしが気がかりなのは、天クルが不祥事起こさないかどうかだけよ」

「夏休みになったら、合宿です。姉さんも参加ですよ」

「監督するためにね」

「また姉さんと一緒にお風呂ですね」

「……変なことしてきたら、お仕置きだからね」

「はい、わくわく」

「蹴るからね」

「痛いお仕置きはしよんぼりです……」

それから、ふたりは夕食の手伝いに取りかかる。

日食は綺麗だったけれど、やっぱり家族そろつての団らんが一番だと、こもは思う。

こさめとは違って、こももの星嫌いは当分続きそうだな。

※

「お姉ちゃんっ」

衣鈴が帰宅すると、鈴葉が息せき切つて出迎えた。

「今日ね、小学校で日食の観測やったんだよつ。すっごく綺麗でね、不思議な

感じだったんだよつ」

おとなしい鈴葉にしてはめずらしく、興奮している。

衣鈴はちよつと面食らつてしまう。

「……そつか。お姉ちゃんも見ただけど、そんな感じだった」

「また見たいな。次はいつになるのかな」

「たしか二十六年後だったと思う」

「……そんなにあとなんだ」

シュンとなる。

衣鈴は失言だったと後悔して、ほかの言葉を探した。

「鈴葉。だけどね、ほかの方法でなら、もつと早く観測できるかもしれない」

「……ほかの方法？」

「うん。南天の星空と同じで……」

「科学館？」

「うん。宇宙科学館のプラネタリウム」

「でも、そこつて閉館してるし……」

「科学館は、雲雀ヶ崎以外にもあるから」

「……わたし、雲雀ヶ崎の外つて出たことない」

「じゃあ、今度連れていつてあげる」

「ほんと？」

鈴葉のうれしそうな問いに、衣鈴は胸を撫で下ろす。

同時に、複雑な気持ちもわき起こる。

「……お姉ちゃん？」

「鈴葉にはまだ言つてなかったけど……。私、ヒバリ校を卒業したら、雲雀ヶ崎を出るかもしれない」

「……え？」

「宇宙科学館に就職したいつて思ってるの」

鈴葉はあつけに取られている。

「でも、もしそうなつても、休みの日はこつちに戻つてくるから」

鈴葉はやつと言葉を返す。

「……うん。わたし、お姉ちゃんが帰つてくるの、待つてるね」

だから今も、鈴葉は笑顔を見せている。

「……だけどね、鈴葉」

衣鈴もまた、そんな鈴葉が大切だから。

「いつか……雲雀ヶ崎の科学館が開館したら、お姉ちゃんは戻ってくる」

「あ……」

「私も、雲雀ヶ崎が好きだから」

今ではもう、南天の星空に負けないくらいに。

「この街の星空が、大好きだから……」

※

「お父さん。天文の世界には、いつ戻るの？」

喫茶店の閉店時間が近くなり、客もいなくなると、明日歩が思いついたように言った。

「……いきなりだね」

「お父さんも日食、観測したんだよね」

「ああ、神社の境内でね。それが？」

「感動したんじゃない？」

「……明日歩の言いたいことはわかったよ」

「そう？」

「これをキツカケに、僕がまた星を追いかけるんじゃないかと心配しているんだろう」

「……心配じゃなくて、期待なんだけどな」

「だいたい僕が勤めに出たら、この店はどうするんだ」

「あたしがいるじゃない」

「明日歩ひとりじゃ難しいだろう」

「あたしも、来年には卒業だよ。お店のことは任せてくれていいから」

「……………」

「お父さんは……あたしのことで、なにも心配しないでいいんだから」

「……そういうわけにはいかない」

「どうして？」

「それが親というものだ」

「……もう。そればかりなんだから」

明日歩はふくれると、それ以上は話を続けなかった。

総一郎は自問する。

明日歩は、理解のある娘だ。じゃあ自分は、理解のある父親なのだろうか。

「お父さんも、頑固だよね」

仕事が一段落すると、明日歩は脱いだユニフォームをたたみながら言った。

「だけど、あたしも頑固だからね」

そして、従業員室に戻っていく。

総一郎はいずれ、天文の世界に帰るに違いない。

きつとその理由も、明日歩なのだ。

自分は、娘には勝てない親バカなのだから。

※

夜になって、洋が出かけの準備をしていると。

「お兄ちゃん、これから展望台？」

千波が玄関に姿を見せた。

「メアちゃんのこと？」

「まあな」

「実はさっき妖精さんに会ったんだよつ、今日は疲れてるからって言っすぐ帰っちゃったけどねつ」

「なんだ、突然」

「千波が妖精さんに会えたんだし、お兄ちゃんもメアちゃんに会えるつて言いたかったんだよつ」

その言葉で、洋の気持ちがいくぶん軽くなる。

「……そうか。ありがとうな」

「千波は事実を述べただけであつてお兄ちゃんに感謝されるいわれはないんだよつ、それよりお小遣いアップこそお兄ちゃんが果たすべき義務なんだよつ」

「考えておくよ」

「ぐりぐりしながら言われると望み薄なのが丸わかりだよお兄ちゃん!？」

「じゃあ、いつてくる」

「いつてらつしやーい!」

感情豊かな妹がそばにいと、不安を感じる暇もない。

これも家族のぬくもりと言えのかと、洋は苦笑しながら考えていた。

※

「メア」

展望台に出向くと、欄干の上で座っているメアを見つけた。

「よかつた……。やつと会えた」

「……会えたつて？」

「捜してたんだよ、おまえのこと。今朝は、起きたら姿がなかったから」

「……………」

「どうした、赤くなつて」

「な、なつてない」

「で、今朝はなんでいなかったんだ？」

「……普通に帰っただけ」

「だつたら、一言くらい欲しかったな」

「……知らない」

「まあ、よかつたよ。ホツとした」

洋は、メアの頭を撫でる。

メアはぶすつとしてゐるけれど、なにも言わずに撫でられている。

その顔は依然として赤かつた。

かささが、星空の海を泳ぐように、そんな二人の頭上をゆつくりと旋回していた。

「かー坊、見つかつたのか」

「……………」

「飛び回つてるし、元気そうじゃないか」

「うん。おかげで、捕まえるのに苦労した」

「これまでどこ行つてたんだろうな」

「たぶん、わたしと同じで、疲れて眠つてたのかもしれない。それで見つからなかつたんだと思う」

「メアとかー坊つて、眠ると見えなくなるのか」

「そうなんだと思う」

「でもおまえ、昨日は普通にベッドで寝てたぞ」

「……………」

「なんで赤くなるんだ」

「な、なつてない」

「かー坊に風邪、うつされたとか」

「メアは、ますますぶすつとする」

「……………」

「うん。そうじゃない」

文句でも言うみたいが続ける。

「この病気は……かーくんのせいじゃない」

メアは洋をちらりと見て、また目を逸らす。

「これは、洋くんのせい……」

「俺にうつされたのか」

「……………」

「それは、なんて病気だ？」

「……………」

「そうか」

洋は、メアの肩をそつと抱く。

メアも心なしに、洋に体重をあずける。

「身体、あつたかいな」

「……………」

「俺のせいかな」

「うん……………」

メアは覗くように、上目遣いをする。

「この病気の正体……教えて欲しい？」

「ああ」

「じ、じゃあ……」

メアはおっかなびつくり、背伸びをして。

洋の唇にキスをした。

「……わかった？」

「……驚いたせいで、わからなかった」

「な、なら……」

メアの顔はもう、ヤケドしたみたいに真っ赤で。

「洋さんに……もつと、する……」

メアは、洋の胸にすがるように、腕を伸ばす。

「しょうがないから……してあげる……」

洋の首に、メアの小さな腕がからまる。

「洋さんと……いっぱい、する……」

そして、たくさんのキスが降る。

星降る夜に負けないくらい。

かささぎの鳴き声が、まるでふたりを祝福するように、雲雀ヶ崎の星空に響いていた。

